

## 序. 慰めに満ちた神への賛美

### ベレーシート

●ここではⅡコリント書の1章1～11節を取り上げます。1～2節の挨拶ではパウロが「使徒」として召されたことが重要です。それについては、「ヘブル人の中のヘブル人・パウロ」の中のパウロの「使徒性」をご覧ください。

【新改訳2017】Ⅱコリント書1章1～2節

- 1 神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロと、兄弟テモテから、コリントにある神の教会、ならびにアカイア全土にいるすべての聖徒たちへ。
- 2 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。

### パウロの「使徒性」について

●パウロにとって、自分が「使徒」として召されたことはきわめて重要なことでした。なぜなら、パウロの使徒性が受け入れられなければ、パウロに啓示された奥義も否定されることになり、教会を建て上げることなどできないからです。特に、コリントの教会ではパウロの使徒性を疑う者が多かったために、パウロは苦慮したようです。またパウロはエルサレムの使徒たちとは違って、イエシュアと共に過ごした経験がないだけでなく、使徒たちによる按手もなく、また推薦状も持っておりませんでした。勝手に自分を使徒だと自称しているだけであり、パウロの教えに従う必要はないと思われていたのです。しかしパウロ自身は、使徒であることの証印とは、キリストのためにどれほど苦悩したかということにかかっていると主張したのです。

●パウロの召命の一連の出来事の中で、主がダマスコに住む弟子の一人アナニヤに語った言葉があります。「彼(サウロ=パウロ)がわたしの名のためにどんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示します。」(使徒9:16)とあります。この苦しみこそ使徒職が与えられたことの証印だと彼は自覚していたのです。使徒とは、神のご計画のために苦しみを担うという責任を負わされた者で、人に権威を振りかざして支配しようということではありません。Ⅱコリント11章23～27節にはパウロの苦難のカタログが記されています。さらに、苦難の重さだけでなく、直接的啓示による神の奥義の豊かさも彼を使徒として確信させるものでした。

●パウロは「私は使徒の中では最も小さい者であり、神の教会を迫害したのですから、使徒と呼ばれるに値しない者です。ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは無駄にはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。」(【新改訳2017】Ⅰコリント

## II コリント書の瞑想

15:9~10)としながらも、「月足らずで生まれた者のような私にも現れてくださいました」と述べ、自分が「使徒」とされたことに反対する者に対しては一步たりとも譲歩しませんでした。

●「使徒」とは、キリストによって「遣わされた者」「派遣された者」(ギリシア語は「アポストロス」ἀπόστολος)、ヘブル語は「シェリーアツハ」שְׁלִיחַ)という意味です。「遣わされた者」の原型が「御父から遣わされたイエシュア」です。ここからは3~11節の「慰めに満ちた神への賛美」を瞑想します。

### 1. すべての慰めの神

【新改訳 2017】II コリント書 1章 3~7節

- 3 私たちの主イエス・キリストの父である神、あわれみ深い父、あらゆる慰め(παράκλησις)に満ちた神がほめたたえられますように。
- 4 神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます(παρακαλέω の分詞)。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰め(παράκλησις)によって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰める(παρακαλέω の現受)ことができます。
- 5 私たちにキリストの苦難があふれているように、キリストによって私たちの慰め(παράκλησις)もあふれているからです。
- 6 私たちが苦しみにあうとすれば、それはあなたがたの慰め(παράκλησις)と救いのためです。私たちが慰めを受ける(παρακαλέω の現受)とすれば、それもあなたがたの慰め(παράκλησις)のためです。その慰め(παράκλησις)は、私たちが受けているのと同じ苦難に耐え抜く力を、あなたがたに与えてくれます。
- 7 私たちがあなたがたについて抱いている望みは揺るぎません。なぜなら、あなたがたが私たちと苦しみをともししているように、慰め(παράκλησις)もともししていることを、私たちは知っているからです。

#### (1) 「慰め」という語彙

●3~7節に「慰める」「慰め」という言葉が繰り返されています。動詞「パラカレオー」(παρακαλέω)が4回。名詞「パラカレシス」(παράκλησις)が6回です。どういことでしょうか。動詞の「パラクレオー」(παρακαλέω)の「パラ」(παρ)は「傍らに」を意味し、「カレオー」(καλέω)は「呼ぶ」を意味する合成語で「傍らに呼ぶ」を意味します。ちなみに、それが人格化したのが「パラクレートス」(παράκλητος)で、「助け主」(Counselor)と呼ばれます。「助け主」とは「傍らに呼び出された者」、私たちの「傍らに寄り添ってくださる」聖霊のことです。ヘブル語にすると動詞「慰める」は「ナーハム」(נָחַם), 名詞「慰め」は「ネハマー」(נֹחֵם)です。特に、「ナーハム」(נָחַם)の初出箇所は創世記 5章 29節です。

## II コリント書の瞑想

【新改訳 2017】創世記 5章 29 節

彼はその子をノアと名づけて言った。「この子は、【主】がのろわれたこの地での、私たちの働きと手の労苦から、私たちが慰めてくれるだろう。」

●「彼」とはノアの父レメクで、「この子は、【主】がのろわれたこの地での、私たちの働きと手の労苦から、私たちが慰めてくれるだろう。」と言って、自分の子を「ノア」(נֹחַ)と名付けました。「ノア」は「慰め」の存在なのです。

### (2) 「慰め」とは

●レメクは父メトシェラを通して、神のさばきがやがて来ることを知っていました。人間の罪深さが神を怒らせ、そのさばきが免れ得ないことを知ったレメクは、自分の息子をノアと名付けました。なぜならそこに神の慰めを見出したからです。父レメクが自分の息子の名前を「ノア」としたのは、「主が この地をのろわれたゆえに、私たちの働きと手の苦勞から、私たちが慰めてくれるだろう」と一縷の望みを息子のうちに見たからです。これは、イスラエルの救いを待ち望んできた老シメオンがエルサレムで幼子のイエシュアを抱いた時、そこに救いの全貌を目にしたのと似ています。つまり、レメクは地上の環境が暴虐に満ちていたとしても、そこに神の慰めを待望する信仰をもった人物の代表と言えます。

## 2. 苦難と慰め

### (1) 「苦難に耐え抜く力」

●「慰め」と「苦難」は密接な関係を持っています。イスラエルの慰めを待ち望んでいた老シメオンが両親を祝して、「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れたり立ち上がったたりするために定められ、また、人々の反対にあうしるしとして定められています。あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くことになります。それは多くの人の心のうちの思いが、あらわになるためです。」(ルカ 2:34~35)と母マリアに言ったように、「慰め」とは困難や苦難を避けることではなく、むしろ勇気を与えてそれに立ち向かわせること、苦難に耐え抜く力(Ⅱコリント 1:6)を意味します。

●パウロがここで「慰め」という語彙を多く使っているのは、耐え難いほどの苦難を経験しながらも、それに耐え抜く力を経験したからです。それは彼が自分を使徒として召されたことにも関係しています。

【新改訳 2017】使徒の働き 9章 15~16 節

15 しかし、主はアナニアに言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選びの器です。

16 **彼がわたしの名のためにどんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示します。」**

## II コリント書の瞑想

●このイエシュアのことばはダマスコに住む主の弟子であるアナニヤに対して、パウロ(その頃は「サウロ」と呼ばれていました)が、主の名のためにどんなに苦しまなければならないかを示すと言っています。使徒として選ばれることは、主のために苦しみを受けることなのです。それが使徒としてのしるしなのだとかパウロは理解していました。苦難のない使徒の務めはあり得ないということです。ここが偽使徒との違いです。

●II コリント 11 章 21 節以降には、パウロは「言うのも恥ずかしいことですが、・・・だれかがあえて誇るのなら、私は愚かになって言いますが、私もあえて誇りましょう。」と言って、苦難のカタログとも言える内容が綴られています。

【新改訳 2017】II コリント書 11 章 23～27 節

23・・・私は彼ら以上にそうです。労苦したことはずっと多く、牢に入れられたこともずっと多く、むち打たれたことははるかに多く、死に直面したこともたびたびありました。24 ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、25 ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、一昼夜、海上を漂ったこともあります。26 何度も旅をし、川の難、盗賊の難、同胞から受ける難、異邦人から受ける難、町での難、荒野での難、海上の難、偽兄弟による難にあり、27 勞し苦しみ、たびたび眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さの中に裸でいたこともありました。

### (2) 慰めの連鎖

●苦難の中で神の慰めを経験したパウロは、慰めの連鎖=「自分から私たちへ、私たちからあらゆる人たちへ」を次のように述べています。

【新改訳 2017】II コリント書 1 章 4 節

神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。

●真珠は貝の中に異物が入ることによってできた結晶であるように、「慰め」の経験は「どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができる」というのは真理なのです。

●イザヤ書 40 章は「慰めよ、慰めよ、わたしの民を」で始まります。原文は「ナハムー・ナハムー・アンミー」(נַחֲמוּ נַחֲמוּ אֶת־עַמִּי)です。そして「エルサレムの心にあなたがたは語りかけよ。これに呼びかけよ。」と続きます。40 章は以下に見る四つの慰めがあります。

- ①「**解放者による慰め**」・・・やがてその罪は償われ、解放されるという約束。二倍のものを主から受け取るという約束。いずれもこれらの約束は完了形で記されています。これはペルシアの王キュロスによって成就します。神は異教の王さえも支配される方です(2 節)。
- ②「**牧者による慰め**」・・・主は羊飼いのように、ご自分の民を飼ひ、御腕に引き寄せ、ふところに抱き、優

## II コリント書の瞑想

しく導かれる方です(11 節)

- ③ 「**創造者による慰め**」・「だれが・・・をしたのか」という構文でたたみかけています。「あなたがたは目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ」と言われる方です(12～26 節)。
- ④ 「**永遠者による慰め**」・主は永遠の神、その英知は計り知れない。私たちの知恵をはるかに超えた方です。その主を待ち望む者は新しく力を得、驚のように、翼を広げて上ることができるのです。まさにこれこそ「慰め」の骨頂です。ノックダウンされることがあっても、決してノックアウトされないのです。神の慰めは、本来きわめて終末論的なのです(28～31 節)。

### 3. 「慰め」は「救い」と同義

【新改訳 2017】II コリント書 1 章 8～11 節

- 8 兄弟たち。アジアで起こった私たちの苦難について、あなたがたに知らずにいてほしくありません。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほどでした。
- 9 実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。
- 10 神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました(ἐρρύσατο)。これからも救い出してくださいます(ῥύσεται)。私たちはこの神に希望を置いています。
- 11 あなたがたも祈りによって協力してくれば、神は私たちを救い出してくださいます(ῥύσεται)。そのようにして、多くの人たちの助けを通して私たちに与えられた恵みについて、多くの人たちが感謝をささげるようになるのです。

●動詞「ナーハム」(נָחַם)の強意形ピエル態は「慰める」という意味で、それは「救い」と同義です。父レメクは息子ノアのうちに神の慰め(=救い)を見たのです。ノアは神から大洪水による神のさばきを信じて、そのさばきから免れる箱舟を造りました。周囲の人々による嘲笑にもかかわらず、ノアは信仰によって箱舟を造り続けたのです。そしてノアとその家族は神のさばきから救われたのです。ノアはメシアの到来による新しい神の支配(天の御国の成就)の信仰を象徴しています。「非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほど」の苦難の中で、パウロも天の御国における「**すでに**」と「**いまだ**」の緊張において、同じ信仰による希望を神に置いています。この信仰の確信のゆえに、神に賛美と感謝をささげているのです。

- 10 神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました(ἐρρύσατο)。これからも救い出してくださいます(ῥύσεται)。私たちはこの神に希望(※「ハティクヴァー」הַתִּיקְוָה)を置いています。

※イスラエルの国歌は「ハティクヴァー」。